

忘却と追憶：

ジョージ・バンクーバーの太平洋航海

石倉和佳

1. はじめに

18世紀後半に始まるイギリスロマン主義期の時代は、イギリスが太平洋の探索を本格的に始めた時期であった。ジェームズ・クックによる3回の太平洋航海がもたらした太平洋の島々や海域の情報は、太平洋地域の地理に明確な輪郭を与えた。そしてそれ以後の数々の探検調査によって瞬く間に空白の地域が精密に地図化された。クックの航海に2回同行し、その後ハワイ諸島からアメリカ大陸北西部、現在のブリティッシュ・コロンビア州およびその北部を調査し、正確な地図を残したのはジョージ・バンクーバー (George Vancouver, 1757-1798) である。彼が指揮官 (Captain) として遂行した太平洋調査は、イギリス海軍による海洋における地理的発見を目指した最後の、そして最長期間におよぶ調査航海であり、この間彼が名付けた地名は数百に上ると言われている。バンクーバーといえばカナダの主要都市の名として思い起こされるが、カナダ太平洋鉄道の社長であった W. ヴァン・ホーン (William Van Horne) が新しく太平洋岸に作られる終着駅の町をバンクーバーと名付けたのは1886年であった。岸の向こうに大きく横たわるバンクーバー島の名はすでに人々によく知られていた¹。

ジョージ・バンクーバーの太平洋調査隊は、ディスカバリー号 (Discovery) と補給船のチャタム号 (Chatham) 二隻の艦隊によって、1791年4月に出航した²。彼の公的な目的は、現在のカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州西岸沖にあるバンクーバー島のヌートカ湾 (Nootka Sound) の領有をスペインが主張したため、その領域でのイギリスの権益を守るために交渉を行うことと、アメリカ大陸の北西部から大西洋へぬける北西航路が存在するかどうかを確認することであった。こうした目的から、彼は現在のオレゴン州西岸からアラスカに至るまでの正確な沿岸の地図を作製した。また、ハワイには冬越しのため3度滞在し、カメハメハ一世との信頼関係を築き、ハワイをイギリスの保護領とすることを取り計らった。そして、この航海の一部始終を描いた航海記

を、帰国後自ら執筆したのである(*A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean, and round the World*, 3vols., 1798)。クックの場合もそうであるが、公式な航海記は多くの場合航海日誌を元に編集者が書き直すことが通例となっていた。単語数で 50 万ワードを下らないと言われるこの長大な航海記を、バンクーバーが自分の手でほとんどを書き上げたことは特筆すべきことである³。彼の航海記には当代一流の地図製作者(cartographer)による地図が付けられ、その後アメリカ北西部の地図として長く利用されることとなった。以下の章では、バンクーバーが帰国した後のイギリスでの反応、ハワイの歴史に登場するバンクーバー、そして彼の人生とアメリカ北西沿岸部の地理調査など、バンクーバーについていくつかの角度から考察する。

2. 消されたジョージ・バンクーバー

ジョージ・バンクーバーの航海記が出版されたのは 1798 年である。この年は奇しくもイギリスロマン派の代表的詩人であるワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) とコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の『リリカル・バラッズ』(*Lyrical Ballads*, 1st ed.) が出版されたのと同じ年であった。この詩集はイギリスロマン主義の時代の到来を告げるものと位置づけられてきたものである。詩集の冒頭を飾ったコールリッジの「老水夫の歌」(*The Rime of the Ancyent Marinere*, 1798 version) と、バンクーバーの航海記が、海軍関係の雑誌である『ナヴァル・クロニクル』(*Naval Chronicle*) でどちらも取り上げられているのは興味深い。太平洋航海というテーマにおいて、バンクーバーの航海記はイギリスロマン主義期でもっとも重要なものの一つと考えられる。

しかしバンクーバーの航海記がテキストとして文学研究に利用されることはほとんどない。その内容についても、言及されることはまずなかったと考えられる。一つの理由として、バンクーバーや彼の航海記が、ナポレオン戦争期を経てその後長く人々の記憶から消されてしまったという事実がある⁴。彼が長い航海を終え帰国した 1795 年から彼が亡くなる 1798 年までの間、彼の風評はイギリス海軍を取り巻く人間関係の軋轢のなかで悪化し、一種のスクandalの渦中に置かれることになった。この点については、当時イギリス海軍にも強い影響力を持っていた王立協会会長のジョセフ・バンクス (Joseph Banks, 1743-1820) が関与していた。調査探検に出航する前

の段階から、バンクスはバンクーバーに好意を持っていなかった。バンクスのバンクーバーへの反感は、バンクスが植物学者のアーチボールド・メンジーズ (Archibald Menzies, 1754-1842) を調査隊の一員として任命するにあたって、実質的に任命者として活動していたことから始まる。バンクーバーに対して、バンクスは植物学のための収集活動を行うための資材を船に持ち込むことを交渉したようであるが、バンクーバーの反応はバンクスの意向をくみ取ろうとするものではなく、バンクスにとっては階級が下の人間が取るものではない、横柄で無礼なものと感じられたようである⁵。

こうしたバンクスの反感は、航海が終わってメンジーズの日記や記録をバンクーバーが渡すように要求した際にも増幅した。バンクスは自分が派遣したメンジーズの旅行記が別に出版されるべきだと考えていたようである。メンジーズに再三、旅行記を仕上げるように連絡しているが、バンクーバーの航海記より先に公開して出鼻を挫くことを考えたようである⁶。乗組員たちが航海の間に書き溜めた記録は、しかし海軍の命令によって、公式の航海記を執筆するバンクーバーの元に全て集められた。メンジーズはバンクスの要求には結局答えず、自分の旅行記としても発表しなかった。メンジーズは航海の間に採取植物の保護を訴えてバンクーバーと対立したこともあったが、基本的には航海の安全と海軍からの調査命令の完遂を優先した船長の意図を理解していたようである。

問題だったのは、時の首相ウィリアム・ピット (William Pitt, 1759-1806) の甥であったトマス・ピット (Thomas Pitt, 2nd Baron Camelford, 1775-1804) が乗組員の中にいたことだった。ピットは、航海の間に規律違反で罰として鞭打ちを受け、最後にはハワイで任務を解かれた。素行不良の船員はほかにも何人が記録されており、鞭打ちについても当時の処罰として珍しいものではなかった⁷。この件がバンクーバーの名誉にかかわる論争となるのは、ピットが航海に出てイギリスを留守にしている間に父が亡くなり、爵位を継いだことが影響している。キャメルフォード男爵となった彼は、イギリスに戻りバンクーバーの帰国を待ち受け、彼が暴力的で非人間的な船長であり自分を侮辱したとして決闘を申し込んだ。その上路上で彼に殴りかかるなどの事件も起こしている。これらの出来事は新聞で報道され、風刺画に描かれ、そのためにバンクーバーが嘲笑的となることもあった。ピットの執拗なつきまといから身を守るためにバンクーバーは裁判所に保護を申し出なければならなかった⁸。裁判所の裁定では男爵

側に罰金が科された。長い航海を終えイギリスに戻ってから、バンクーバーが死ぬまでの期間は 3 年足らずであった。この間、航海記の出版に注力しなければならなかったことを考えると、バンクーバーの側から見れば、新聞をにぎわせたキャメルフォード事件で社会的なダメージを受けたとはいえ、そのことが彼の指揮した調査探検の意義を減じるものとは決して考えられなかったと推測できる。

18 世紀のイギリス社会の様々な組織の運営において、貴族や上流の人々が大きな力を持つことがしばしばあった。バンクスはイギリス海軍に意見を述べる事が出来る立場であり、そうした力は上流階級のネットワークを担保として彼に付与されていた。ピットの母が息子を心配してメンジーズに詳細を尋ねた際、メンジーズはそれをバンク스에報告したが、その手紙からはバンクスが好まない報告をしないでおくという屈折した態度が読み取れる⁹。メンジーズはピットの性格に問題はなく、むち打ちなどの事実はあったがそれが何の過失によるのか自分は全く知らないと書いている。そしてその手紙にはバンクーバーが航海の間最も信頼していたジョセフ・ウィズビー (Joseph Whidbey, 1757-1833) のサインもあった。自分の書いていることはバンクーバーの信頼する海尉 (Lieutenant) のお墨付きもあると知らせているのである¹⁰。バンクスはメンジーズのような自分の息のかかった人物から、ピットの母にとって耳触りの良い答えを引き出しているが、これは何ら過誤のない船員をむやみに罰するサディスティックな船長としてバンクーバーの信頼を貶める道具を揃えているようにさえ見える。バンクスの周りからはこのように様々な情報が、彼の暗黙の操作によってニュアンスを付与されながらゴシップと一緒に流れ出ていた。たまりかねた兄のチャールズ・バンクーバー (Charles Vancouver, c.1756-1815?) が新聞に投稿し、鞭打ちについては、船長は非常に不本意であったがディスカバリー号の規律を守るため仕方なく行ったことである、と反論している¹¹。

バンクーバーの調査で人々の関心を最も集めていたのは、北西航路が存在するかどうかという点であった。調査探検によって北アメリカ北西部の沿岸は、北極圏に入るまで北西航路と呼べる大西洋まで抜ける水路は存在しないことが明らかになった、というのが彼の結論であった。当時すでに、中国大陸、ハワイ、ベーリング海の海域などをつないで捕獲船や商船が行きかうようになっていた。毛皮やその他の物産の利権を求めて太平洋へとヨーロッパの人々が乗り出して



<地図に描かれた北西航路>

図中、白い部分が陸地である。下部に“New Albion”とある箇所が現在のサンフランシスコの北部にあたる。そこから北方に、東北に延びる水路がいくつか描かれている。右上方にある湾がハドソン湾である。バンクーバーの時代まで、北アメリカ大陸を横切る、太平洋から大西洋に抜ける航行可能な巨大な水路の存在が信じられていた。

Bancroft, *History of the Northwest Coast*, 131. From Thomas Jeffery's map, 1761

イギリス海軍による北西航路探検の推進者であった。バンクーバーがクックの第3回公開でベーリング海の最北に達したとき、北緯 72 度であったが、1819 年イギリス海軍は、当時は不可能であった到達点である北緯 83 度以北に達した船に懸賞金を出

きていたのである。大西洋と太平洋を最短で結ぶ航路が存在するかどうかは、太平洋海域の物産によって利益を上げようとする人々にとっては重大な関心事だった。北西航路が発見され、アメリカ大陸を抜けて大西洋と太平洋を結ぶ航路が開発されれば、イギリスから世界各地の距離は一挙に縮まるからである。バンクーバーの航海記の書評に北西航路の存在が否定されたわけではないと考える主張も見られたように、北西航路の存在を信じる人々にとっては、バンクーバーの調査報告はさらなる調査が必要なものと考えられたようである¹²。

バンクスの右腕として、海軍本部事務次官として長く奉職したジョン・バロー (John Barrow) の手になる『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopaedia Britannica*) のハワイに関する項目が、バンクーバーの航海記の中の記述がほぼ完全に抹消された形で展開しているのは、バンクスのバンクーバー航海に対する抑圧的な影響を間接的に示すものである¹³。バローは 1810 年代以降の

している。北西航路はさらに北のカナダ北部の北極に近い領域に求められるようになっていった¹⁴。

イギリス文学研究においては 1990 年代以降、同時代の史料を文学研究に利用し、歴史的な文脈とともに文学作品や文芸文化を考察する、いわゆる新歴史主義 (New Historicism) の研究手法が広く受け入れられた。しかしイギリスロマン主義の文学作品の特徴と意義を同時代の海洋探検との関連から掘り下げるものは今に至るまで少ないと言わざるを得ない。一つの理由として、航海記は文学作品と異なり様々な社会的、地理的、そして時には政治的背景と関連している上に、テキストそのものの信ぴょう性や出版することの動機についても検証が必要であることが挙げられる。そしてバンクーバーの場合、現在に至るまでその海洋調査の意味も、また航海誌の内容についても、十分に一般に知られることにはなっていない。イギリス文学の研究においては、多くの探検航海の企画や送り出しに関与し、植物採集などのために自然科学者たち (naturalists) を送り続けたバンクスを媒介として、大洋探索の同時代における文化的様相について考察される場合が多い。その結果、バンクスが語らないバンクーバーの航海について、イギリス文学研究では全く取り上げられない、という事態が起こっている¹⁵。しかしこの事実は、イギリス文学における歴史批評の本質が、歴史的事実を正しく把握しようとする態度に乏しいということを示しているのである。

それでは以下、バンクーバーの航海とその意義についていくつかの視点から検討したい。まず、「ハワイの恩人」として語り継がれた、伝承の中のバンクーバーについて取り上げる。日本語で書かれたバンクーバーについての記述は非常に少ないが、20 世紀初頭の日本人ハワイ移民の出版物には、バンクーバーをハワイの恩人として語る言説が現れる。バンクーバー研究においては、1930 年に出版された G.ゴドウィンの伝記 (Godwin, *Vancouver A Life*) が、バンクーバーの初の伝記であり、またその後の研究の道を開いたものとされている¹⁶。ここでは 20 世紀になってまとまった伝記研究が出版される前に、彼が一定の社会的文脈の中で語られていた背景についてまずは考えてみたい。

3. 「ハワイの恩人」バンクーバー

日本語による書籍の中にバンクーバーが登場するおそらくもっとも古いものの一

つに、奥村多喜衛の『太平洋の樂園』(1917)がある。この書はハワイへキリスト教宣教師として移住し牧師として活動した奥村によるハワイ紹介の書であり、当時人口 10 万人近くに膨らんでいた日本人移民の啓蒙のために書かれたものであった。この本にはハワイを発見したキャプテン・クックの話が冒頭に登場するが、巨大な船に乗って突然現れた彼を現地の人々はロノ神と崇めた、と書かれている。しかしクックの船団は多くの食料を供給させ島民を疲弊させたとして批判的に描かれており、最後に送り出した後、マストの破損で修理に戻ってきたときには、島民の反乱となり命を落とすことになった、という説明が続く(4-6)¹⁷。

こうしたクックに対する批判的な内容に対して、バンクーバーについての記述は全く異なっている。バンクーバーはカメハメハ一世 (Kamehameha I, c.1758-1819)がハワイ全島を統一するに至るプロセスの中で、重要な役割を果たした「ハワイの恩人」として登場するのである。バンクーバーがハワイに寄港しカメハメハに会った時、ハワイに居住しているヨーロッパ人がすでに何人かいたが、その中にカメハメハの軍事顧問として重要な役割を果たしたジョン・ヤング (John Young, c.1742-1835)とアイザック・ディヴィス (Isaac Davis, c.1758-1810)の二人のイギリス人がいた。この二人については次のように述べられている。「カメハメハは賓客の禮を以てデビス、ヤング二人を遇し。追々に逃亡水夫を集めて砲術隊を組織せしめた。かくして文明の利器を備へ。且つ白人の謀主を得たのは、カメハメハが全島統一の大業を成就する主要の力となったのである(原文のまま)」(34)。バンクーバーの航海記にも、カメハメハと初めて謁見したときに、カヌー隊が見事に隊列を組み、ディスカバリー号の前で整列した様子が描かれている¹⁸。カメハメハの親衛隊の軍事訓練はヤングとディヴィスが行っていた。バンクーバーはハワイ島にとどまっている白人の動向に当初から気を付けていたが、ヤングとディヴィスについてはカメハメハの信頼も厚く、ハワイ滞在中にはバンクーバーにも非常に協力的であった。彼らと交流をする中で信頼できる人々と見たバンクーバーは、彼らがハワイの人々にも良い影響を与えていると観察していた¹⁹。

次に、バンクーバーが言及されている箇所を見てみたい。ヤングとディヴィスに親衛隊を組織させ、カメハメハはハワイ島を武装し始めたが、バンクーバーがハワイに到着した時は、マウイ島を攻めて勝利し、ハワイ島に帰ってきた時であった。奇しくも彼がこれからハワイ全土統一に向かう途上にあつたのである。

軍備已に成る。カメハメハは千七百九十年マウイ島遠征を企て。海を渡ってハナに上陸し。カフルイに出てワイルクに進み。イアオ谷 [Iao Valley] に於て布哇歴史上最も悲惨なる劇戦^[ママ]に大勝を得たが。而も未だ全島を征服し得ずしてハワイに帰った。此頃英人バンクーバー前後三回布哇に來り。頗る親切な忠言を與へて王の信頼をうけ。英国との關係を結び。今に至る迄ハワイの恩人の一人として知られて居る。(原文のまま 34-35)

「頗る親切な忠言」というのは具体的にはいろいろと考えられるが、武器等の鉄器を与えない代わりに、家畜や有用な植物の種を与えるといった実際的なことから、ヤングとディヴィスといったカメハメハの忠臣となった者以外の白人を信じないように進言するなどが挙げられる。もっとも重要な点は、カメハメハと彼を中心としたハワイの王族を尊重し、イギリスの保護下に置くという約束をしたことだろう。カメハメハ二世となった息子のリホリホ(Liholiho)がイギリスまでジョージ四世に面会するために渡航したのも、バンクーバーによるハワイをイギリスの保護領とすること、すなわち他国の侵略から守るという約束を確認するためであった²⁰。

次にはバンクーバーが家畜を移入したという話である。当時カリフォルニア地域にある現在のモンテレー(Monterey)の付近にスペインの宣教師たちがコロニーを作っており、バンクーバーはそこで家畜を仕入れて冬越しするハワイへと移送した。家畜を持っていくのは、後に訪問した時に食用に利用できるという意味もあるが、バンクーバーの場合は食料や水を供給してもらうための手土産でもあったようである。

英人バンクーバーが屢々來航して。種々の動物や植物を輸入したことは。布哇農業協会の報告に記してある。即ち千七百九十二年の三月に。摂政カアフマスの父なるハワイ島のケエアモクに山羊、小山羊、蜜柑樹及草花の種を送り。カワイ [カウアイ]島のカウムアリーに山羊のツツガヒ及び鴛二羽を贈る。

千七百九十三年二月には、ケエアモクに一小羊、二牝羊、一牝小羊。カメハメハには二月十九日牝牡の牛、同二十二日五頭の牡牛二頭の牝牛及一小羊を贈り、其後數回に牛及び羊數頭を贈った。(原文のまま 12-13)

これらの記録のうちいくつかは、バンクーバーの航海記にも記載がある。ケエアモク (Keeaumoku) はオレンジの樹や草木の種、そして山羊を受け取ってたいへん喜び、細心の注意を払って世話をすると述べたそうである²¹。バンクーバーが 1792 年と 1793 年にハワイに残した家畜類は早く死んだり、育てる前に食べられてしまうようなことがあり十分に繁殖しなかった。1794 年にはバンクーバーの助言もあり、カメハメハは彼が移入した家畜に 10 年のタブー (Kapu) を布いた。殺したり食べたりせず繁殖させる目的であった²²。彼は武器や鉄器類についても、ジョージ三世がタブーを布いているので渡せないとして決して譲渡しなかったが、ハワイの首長たちはしばらくするとそうした説明を十分理解するようになったようである²³。彼らは食料や水を提供する代わりに、バンクーバーが他所で仕入れてくる家畜、植物、そして布や、時にはビーズなどと交換した。

見てきたように、奥村多喜衛の『太平洋の樂園』には、日本語でほとんど紹介されることのないバンクーバーがしばしば登場している。一つの理由として考えられるのは、ハワイ王朝第七代国王カラカウア (David Kalakaua, 1836-1891) が日本を訪問し官約移民を始めたという縁もあることから、アメリカの準州となったあとでも、日本人移民の間ではハワイ王朝の成立を助けたバンクーバーについて記述することに意義が感じられていたという点である。アメリカ人入植者が政治的権力を握るハワイにおいて、日本人労働者達はしばしばストライキを行い、自らのハワイでの権利を主張していた。そうした運動をさかのぼると、ハワイ併合 (1898) の直前、ロバート・ウィルコックス (Robert Wilcox) と日本人が協同してハワイの独立運動を計画した政治行動にも行き当たる²⁴。

日本人のハワイ王朝への親近感に加えて、ハワイの歴史を語るという意味で重要な点は、J. J. ジャーヴェス (James Jackson Jarves, 1818-1888) の『ハワイの歴史』 (*History of the Hawaiian or Sandwich Islands*, 1843) の影響が奥村の著述にも顕著に表れている点である。著者の知る限り、この本はハワイ史をまとめたもっとも初期のものとして重要であり、しばしば参照されてきた。ジャーヴェスは 1837 年にハワイに渡り、『ポリネシアン』 (*Polynesian*, 1840-1848) というハワイで発行されていた新聞の編集者をしてきた。彼は『ハワイの歴史』の中でクックを批判的な論調で取り上げる一方、

バンクーバーを非常に高く評価し、バンクーバーはイギリス海軍の船長として最も誇るべき人物であったとまで述べている(177)。ジャーヴェスはバンクーバーの来訪の成果を次のように語る。まず、イギリス国民にハワイの人々の良質な面を知らせることになり、カメハメハの名を世界に紹介することになったという点をあげ、イギリスのような強力な国家がハワイに強い関心を抱いていると知るとは、ハワイの人々が陥りやすい過誤を食い止めることになり、また白人たちが悪いたくらみをするのを防いでくれる、と論じているのである(176)。ジャーヴェスはバンクーバーを、ハワイの人々にモラルを教えイギリスの保護を約束した人物として称えた。彼がハワイを最初に訪ねた頃、バンクーバーを記憶している首長がまだ存命であったようで、長いこと再訪を待っていたという(177)。

バンクーバーを殊更に「ハワイの恩人」と称賛する傾向は、その後のハワイの歴史書などにも登場する²⁵。イギリス国内では忘却に近い状態となっていたバンクーバーの海洋航海の成果は、ハワイで活動した人々の手によって、事実に基づいてはいるものの、一種の伝説めいた物語へと変貌したと言えるのかもしれない。しかし実際バンクーバーがハワイに立ち寄ったのは、ハワイの人々を守ることが第一義だったわけではない。ヌートカ湾で起こっている、スペインとの領土問題を解決し、北西航路の有無を確認するために、食料や水の補給を兼ねた冬越しの地を求めてのことである。ハワイで無事に冬を越せないとなると、調査そのものが遂行不能になることも考えられる。1792年、最初にハワイに立ち寄ったとき、バンクーバーの船はカウアイやオアフでは必ずしも歓待を受けなかった。彼のハワイでのふるまい方は慎重であり、まずは現地の情報を集めることに腐心している。そして同年、バンクーバー調査隊の物資輸送船ディーダラス号(*Daedalu*)の中尉ら3名が、オアフ島で現地人に殺されるという事件が起こった。バンクーバーはこの殺人事件の調停に入り、現地の人々に自発的な殺人者への裁定を促している²⁶。彼にとっては、クックの死を引き起こしたハワイの人々の暴動を何としてでも避けるということがまず念頭にあっただろう。ハワイの人々との友好的関係を維持するということは、今後のイギリスの太平洋領域における影響力を強くすることでもあった。前述したように、バンクーバーは2度目のハワイ寄港の際カメハメハに会い、彼が王としてふさわしいと考えたようである。そしてヤングやディヴィスなどカメハメハに助けられてハワイで生きることを選んだ人々に会い、当

時のハワイの各地の首長たちの勢力図など正確な情報を手にすることが出来たのである。

4. バンクーバーの太平洋調査隊と北西航路

ここでは、バンクーバーが指揮官として太平洋探索に至る迄、どのような人生を辿ったのかを振り返りながら、彼の太平洋での任務であったヌートカ湾をめぐるスペインとの交渉と北アメリカ北西沿岸の細密な調査について見ていきたい²⁷。彼が生まれたのはイギリス東部ノーフォーク州のキングス・リン(King's Lynn)という町である。この町はウーズ川(River Ouse, Yorkshire)の河口近くにある貿易で栄えた中世からの町で、古くはハンザ同盟の一都市でもあった。彼の父親のジョン・ジャスパー(John Jasper Vancouver, d. 1773)は関税官をしており、バンクーバーには5人の姉と兄がいた。彼の先祖はオランダのバン・クーバーデン(van Coeverden)という旧家であり、東の国境近くの城塞を守っていたという。18世紀になるころに、イギリスに移住し、姓をバンクーバー(Vancouver)と変えた。兄チャールズはオランダのバン・クーバーデン家の女性と結婚しており、一族のつながりは続いていたようである。バンクーバーは病のため航海記が出版される前に亡くなったため、書籍となった航海記を見ることはなかったが、もう一人の兄、ジョン・バンクーバー(John Vancouver, c.1755-1829)が、ほとんど完成していた原稿の最後の部分を完成させ出版した。

バンクーバーは、キングス・リンで少年期を過ごした後、14歳でイギリス海軍に入った。そして彼はキャプテン・クックの第2回世界一周航海(1772-1775)に同行する乗組員となり、レゾリューション号(*Resolution*)に配属された²⁸。この航海の間、彼はクックの下で船員としての訓練を受け、同行したウィリアム・ウェールズ(William Wales, c.1734, d.1798)に天体観測や測量などを習ったという²⁹。彼はクックの第3回航海(1776-1780)にも同行した。クックが最後に北極圏へと突入し、北緯72度まで北上し、大きな氷の壁に阻まれて前進を断念した際、船の舳先に突き出したバウスプリット(bowsprit)の先端で「極限だ!」(“Ne Plus Ultra”)と叫んだという話が残っている³⁰。後の彼自身の探検航海も、クック第3回世界一周航海と同様の航路を取ることになる。クックが死に至ったハワイ島のケアラケウア(Kealakeua)では、バンクーバーは現地人の暴動に巻き込まれた³¹。彼がハワイでカメハメハと信頼関係を結んでいく背景に

は、二人とも若いころにクックのハワイ訪問時にハワイ島にいたという事実がおそらく関係している。

1780年、バンクーバーは海尉(Lieutenant)に昇格し、イギリス海峡やカリブ海を巡回する任務についた。その後、カリブ海一体のイギリス海軍最高司令官であった海軍少将アレクサンダー・イネス(Rear Admiral Alexander Innes)の旗艦であるヨーロッパ号(*Europa*)に海尉として乗船し、イネスの死後、アラン・ガードナー(Sir Alan Gardner)が後を引き継いだあとカリブ沿岸での任務を続けた。1786年からは、ジャマイカのポートロイヤル(Port Royal)やキングストン(Kingston)の測量を行い精密な地図を残している。1787年、彼はヨーロッパ号の第一海尉(First Lieutenant)となり、1789年まで任務に就いた。ガードナーはバンクーバーがイギリス海軍による太平洋調査の指揮官(Captain)となる際、彼を推薦した人物である。

先に述べたように、バンクーバーの太平洋調査の一つの目的は、ヌートカ湾をめぐる権益についてスペインと交渉しイギリスの交易の権利を確実にすることであった。クックの第3回航海において、北アメリカ北西の太平洋岸からベーリング海に向かう海域で、ラッコが大量に生息していることが分かり、そのことが航海記などによって知られるようになると、スペイン、アメリカ、イギリスと各国がこの海域に毛皮の狩猟をするために入ってくるようになっていた。イギリスの海軍士官であったジョン・メアーズ(John Meares, c.1756-1809)は、中国とカナダ北西部の太平洋岸とを行き来し、ヌートカ湾に入り、ハワイにも立ち寄っていた。そのころロシアがアラスカを占拠しようとしていることに敏感になったスペインは、カナダ北西部の領有を宣言し、植民地を作る計画を立てた。現在のブリティッシュ・コロンビアの地域も含めて、スペインの領有地(New Spain)は北アメリカの西半分をほとんどを占拠するほどに広がっていた。1789年、植民地建設のためスペインの探検家マルティネス(Esteban Jose Martinez, 1742-1798)がヌートカ湾に到着したとき、メアーズの船が停泊しており、直ちにスペインの領有を侵害するものとして捕縛された。このことが国際的な政治問題に発展し、バンクーバーの調査隊の派遣につながっていくのである。

バンクーバーの太平洋調査探検隊は、1791年4月イギリスを出航、大西洋を南下して喜望峰に達し、東に向かってオーストラリアまで6か月ほどで到着した。ディスカバリー号とチャタム号は同じ航路を辿ってニュージーランドを回り、タヒチからハワイ

へと航行した。1792年3月から4月にかけてオアフ島で過ごし、すぐに北アメリカへと向かった。以後3回に渡り、現在のカナダを含むアメリカ大陸西北沿岸部およびアラスカ沿岸における、バンクーバー隊の測量調査が続くことになる。1792年6月、現在のカナダの都市バンクーバーの地域とバンクーバー島の間にあるジョージア海峡 (Strait of Georgia) の調査を開始した時、スペインの調査隊に出会い、船長のガリアーノ (Dionisio Alcalá Galiano, 1762-1805) と協力して双方がバンクーバー島の沿岸調査を行い、バンクーバー島が大陸とつながった半島ではなく、大きな島であることを確認している。

1792年8月、バンクーバーはバンクーバー島の太平洋沿岸にあるヌートカ湾に着き、停泊していたスペインの指揮官、クアドラ (Juan Francisco de la Bodega y Quadra, 1743-1794) と対面した。この調査隊の一つの大きな目的である、スペイン側の指揮官との合流に際し、双方の船は交互に祝砲をあげたという。ヌートカ湾で起こったスペインとイギリスのアメリカ大陸北西湾岸の領土と航海権をめぐる利権の衝突を、バンクーバーはスペイン側と話し合っ解決しなければならなかった。バンクーバーとクアドラは友好的に交渉を進めたが、双方の利害は対立したままであった。クアドラがイギリス側に提案したのは、湾に面した狭小な土地の利用だけであり、バンクーバーはその提案を受け入れず、本国からの連絡を待つことになる。

1793年、1794年と、バンクーバーの調査隊はハワイでの冬越しと夏の期間にアメリカ北西部からアラスカにかけての調査を続け、湾から陸地へと入り込んだあらゆる水路の状態について調査した。この地理調査は、小舟に乗り換えて湾の中に入っていきやり方で行われた。バンクーバーの他には、ウィッドビー、ピュジェット (Peter Puget, 1765-1822)、ベイカー (Joseph Baker, 1767-1817)、ジョンストン (James Johnstone, c.1759-1823) らがこの任務についた。1793年の調査では、バンクーバー島の北部からさらに北上し、クイーン・シャーロット海峡を通過してアラスカ南部までを踏破している。1794年にはアラスカ、現在のアンカレッジのあるクック湾付近の調査を終えるとそこから南下し、アラスカ南部のプリンス・オブ・ウェールズ海峡までを調査し、調査の終了を祝った。彼はその際に停泊した湾を、「終結の港」ーポート・コンクルージョン (Port Conclusion) と名付けた³²。彼らの残した地図はその後1世紀以上の間、正確な地図

として用いられることになる。先にも述べたように、この調査の目的は、正確な地理情報に加えて、北西航路の有無を確認することであった。調査を終えたバンクーバーは、アメリカ大陸北部を横切る北西航路はないと結論づけた。

湾岸の測量調査が続く間、スペイン側との交渉に関しては本国から何一つ連絡が来なかった。バンクーバーが太平洋航海を続けている間に、ヨーロッパの状況は急速に変化していた。1793年にイギリスはフランスと交戦状態に入り、スペインはイギリスの同盟国となっていたのである。バンクーバーの調査隊派遣が決まったときのスペインとの対立感情はすでに冷却していた。しかしそうしたヨーロッパ情勢はアラスカとハワイの間を行き来し続けているバンクーバー隊には届かなかった。バンクーバーは判断を仰ぐために1792年のクアドラとの最初の交渉の後、すぐに本国に状況を説明する書簡とともに、ディスカバリー一号の海尉であるZ.マッジ (Zachary Mudge, 1770-1852) を中国経由でロンドンに帰国させた。そしてチャタム号の船長であったW.R.ブロウトン (William Robert Broughton, 1762-1821) にクアドラとの往復書簡の写しを託し、メキシコ経由でロンドンに送り返した。

マッジがロンドンに到着した頃、ロンドンでは海軍本部書記官長がヌートカ湾の問題について、イギリス、スペイン双方が共同して湾の利用を行うことが出来るとし、領有については不問に付すという方向で調整することを決めている³³。しかしバンクーバーが1794年の夏、ヌートカ湾に到着した時にさえ、これらの決定は全く知らされておらず、代わりに同年3月にクアドラが突然亡くなったと連絡が入った。クアドラの後を継いで交渉のためにヌートカ湾に指揮官として来たアラバ (José Manuel de Alava) も、具体的な交渉については聞いておらず、測量調査が終了していたこともあり、バンクーバー隊は帰国を決めた。10月、ディスカバリー号とチャタム号は帰路に就くために南方へ出発した。国際状況が刻一刻変わり、スペインとの交渉に関して何等の指示もない中で、バンクーバーはスペイン側との交渉を打ち切って帰国したことになる。バンクーバーの外交手腕はハワイでは十分発揮されたが、ヌートカ湾での交渉についてははっきりした結論を得ないままとなった。とはいえクアドラからの要求をうまくかわしながらスペイン側の領土的野心をけん制し続け、しかも交渉相手の

スペイン側とは友好的な関係を維持し続けたのであるから、外交交渉としては成功であったと考えることができる³⁴。

5. おわりに

ここまで、イギリスロマン主義期に航海記を出版し、クックの第3回世界一周航海を引き継ぐ形で太平洋航海を行い、ハワイの王朝に関わり、アメリカ北西沿岸からアラスカにかけての調査を行ったバンクーバーについていくつかの視点から考察した。バンクーバーの太平洋調査とその航海記は現地の人々の記録としても、地理的な測量の成果としても、非常に質の高いものである。彼の航海記は、緻密で細部を克明に記録する記述が多く、そうした観察の癖は、風景を語らせると独特なグラフィックな効果を現出する場合がある。そして航海の中での語るべき部分が時系列に整理されながら登場するのであるが、複雑な出来事には一旦立ち止まって語りなおすところが冗長に思えるところもある。通過地点に次々と名前を付けていく際の彼の記述は、その名の意味を読者が推考するとき、彼の語りに独特のニュアンスを付与している。こうした様々な語りの手法は、ジョージ・バンクーバーという人間の思考をよく語っている。クックのように英雄的に語られることがなかったバンクーバーであるが、それは彼の航海記が多くの人々に読まれなかったことも影響しているだろう。彼の航海記は高価な書籍であり、その後19世紀の間廉価版やダイジェスト版が出版されることもほとんどなかったからである。

最後に、バンクーバーについて特に研究されていない点があるとすれば、それは彼を一人の航海記の作者として考えることではないだろうか。太平洋の航海と訪問した各地の出来事についての彼の記述が同時代にどのように読まれたか、また読みうるものであったかという点を検討することは重要であろう。彼の航海記の同時代の書評は数多く残されている。ほとんど具体的に検討されていないこれらの書評をとりあげ、航海記の内容をロマン主義文学の文脈との関連で検討することを筆者の今後の課題としたい。

(本研究はJSPS 科研費 18K00423 の助成を受けたものである。)

-
- ¹ 現在のカナダのブリティッシュ・コロンビア州にあるバンクーバー島は、当初バンクーバーの配慮により、スペインの指揮官クアドラの名が付いた「クアドラとバンクーバーの島」(Quadra and Vancouver's island) と名付けられた。クアドラはこの名を非常に喜んだという。スペインのアメリカでの領土的関心が後退する中で、19 世紀の間には「バンクーバー島」と呼ばれるようになっていった。Vancouver, vol.1, 106 参照。
- ² ディスカバリー号の定員は 100 名、チャタム号は 45 名である。乗組員は航海の途中に入れ替わることもあり、総数は航海の時期によって異なる。両船の詳細については、Vancouver, vol.4, Appendix 8, 1642-1673 参照。ディスカバリー号は調査船であるが、自衛のための大砲などが備えられていた。
- ³ バンクーバーは自らの旅行記の出版を見ずに亡くなった。彼の健康状態は、航海の後半から徐々に悪くなったようであるが、どのような病のためだったのか、詳細は分からない。結核、甲状腺の病気、アジソン病など様々に推測されている。Vancouver, vol.1, 212 参照。
- ⁴ Bown はこの点について詳細に論じている(207-227)。
- ⁵ Vancouver, vol.1, 31-32 参照。バンクスはクックの第1回航海に同行し、オーストラリアで植物採集などを行っている。彼は第2回の航海にも同行するつもりで、船の改造などを進言していたが、それはクックによって拒否された。編者の K. Lamb はバンクーバーの態度はクックと同様であると示唆している。
- ⁶ バンクスとメンジーズについては、K. Lamb による“Banks and Menzies: Evolution of a Journal,” (in Fisher, Robin and Hugh Johnston. *From Maps to Metaphors*, 227-244) に詳しい。
- ⁷ Anderson によれば、クックの船団におけるよりも、バンクーバーの場合の方が体罰は多かったということであるが、特に際立って多かったということではないということである (221-223)。ピットを鞭打ったことが殊更問題となったのは、時の首相の甥であり上流階級のつながりが多かったことに加えて、イギリスに帰国後ピット自身が執拗にバンクーバーを攻撃したことにある。
- ⁸ この間の事情については、バンクーバー航海記の編者である K. Lamb の説明を参照 (Vancouver, -1vol. 226-248)。当時の新聞としては、*Saunders's News-Letter* (Monday 18 May 1795), *Kentish Gazette* (Friday 30 September 1796), *Northampton Mercury* (Saturday 8 October 1796) などに言及がある。The British Newspaper Archive 参照。ピット(キャメルホード男爵)は 29 歳のとき決闘で死んだ。ピットについての詳細は、Tolstoy, *The Half-Mad Lord* を参照のこと。
- ⁹ この手紙は Vancouver, vol.4, 1637-1638 に引用がある。
- ¹⁰ 本稿におけるイギリス海軍の階級については、Royal Navy Museum, “Officer Ranks in the Royal Navy”を参考にした。海軍組織の職位名については、国や時代によって異なっているが、18 世紀のイギリス海軍将校の職位の訳語については、18 世紀における呼び方として lieutenant を「海尉」としている。
- ¹¹ Vancouver, vol.1, 234-239 に詳細がある。

12 アメリカ大陸北部を横切る北西航路が存在しないというバンクーバーの結論に *Annual Register* (1799) の書評は意義を唱えている。Vancouver, Vol.1, 244 参照。

13 『ブリタニカ百科事典』におけるハワイについての記述については、拙稿、「記述することの空白：ブリタニカの描くハワイ」を参照のこと。

14 Jackson, 6 参照。

15 バンクスについてのイギリス文学研究者による考察として、Fulford et al. (eds), *Literature, Science and Exploration in the Romantic Era*, の “Mental travelers: Banks, African exploration and the Romantic Imagination,” 90-107 および “Banks, Bligh and the breadfruit: slave plantations, tropical islands and the rhetoric of Romanticism,” 108-126 がある。

16 Fisher, *From Maps to Metaphors*, 12 参照。

17 「さあれ土人間には猶クックをロノ神と思ふ迷信全く消へなかつたので。クックの死骸を神殿に運び。解體して筋肉は火に焼き。骨はロノ神の祭壇に納め。遺髪はカメハメハ王に遺り。心臓は三人の子供に犬の臟腑と称へて食はしたと言うことである。土人がクックの肉を食たのことは全く虚伝である。(中略)千八百二十四年リホリホ王(カメハメハ第二世)ロンドンに赴いたとき。曩に失はれた遺骨の残部を携へて。クックの寡婦に贈つたのことである(句点は原文のまま)」(5-6)。ハワイの原住民が食人種ではないように書かれているが、それではクックの心臓を食べた「三人の子供」とは何なのかよくわからない。また、クックが死んだときにカメハメハ一世はまだ若者で、王族の一人ではあったが最高権力者ではなかつた。記述に矛盾があるのは、奥村が何種類かの書籍や自分が聞いた伝承を合わせて書いているためと推測できる。この記述からは、クックの神性を否定し、クックには権力がなく王権が最高位であることを示すために、死体を解体し、その命の源と考えられる心臓はカメハメハの子が食べたと読める。なお、リホリホがロンドンまで来たことは事実であるが、クックの妻、エリザベス(Elizabeth Cook, 1742-1835)に遺骨を渡したかどうかは不明である。

18 Vancouver, vol.3, 806-807 参照。

19 クックが死に至った暴動に近い現地人たちの行動の理由について、部族間の軋轢を調整する強い王権の不在が考えられる。バンクーバーはカメハメハを王とすることで、ハワイの部族間の闘争がなくなる方向を見ていたと考えられる。バンクーバーのハワイに関する海軍への報告書として、Vancouver, vol.4, 1597 参照。

20 Kuykendall, 76-78 参照。1824年、カメハメハ二世はイギリスに渡航したが現地で麻疹にかかり王に面会せず死亡した。イギリスはハワイを保護領とする取り決めを批准することはなかつた。

21 “Kahowmotoo was very anxious to obtain every acquisition of this sort[vegetables &c.], and was made very happy by receiving some fine orange plants, and a packet of different garden seeds; and likewise a goat and kid.” Vancouver, vol.2, 451.

22 バンクーバーによる家畜の移入については、Maly, 21 に詳細がある。その後のハワイでは、家畜を飼う文化がイギリスのように伝統化したかという点、どうもそうではなかつたらしい。19世紀の半ばには、家畜の数は2万頭以上に増え、あたりを自由に動き回り人々の畑や住居を荒ら

すようになったという。Kuykendall, 317 参照。

²³ 1792 年 3 月、Enemoh というカウアイの部族長がバンクーバーに食料を持ってきた際にこのように答えている。“[I] informed him [Enemoh], that the ship, and every thing she contained, belonged to His Majesty King George, who had *tabooed* muskets, pistols and various other articles.” Vancouver, vol.2, 470.

²⁴ ハワイ王朝を支持しアメリカの政治勢力に抵抗しようとする動きは、日本人移民の権利獲得運動と連動して展開した。詳細は拙稿「日本人ハワイ移民の移民会社」参照。

²⁵ ハワイに宣教師の息子として生まれた W. D. Alexander のハワイ史には次のように書かれている。“The three visits of Vancouver form an era in the history of these islands, and his name is justly cherished as that of a wise and generous benefactor to the Hawaiian people.” (134)

²⁶ Godwin はこの時のバンクーバーの裁定について、“The manner in which Vancouver conducted this trial probably did more to enhance the reputation of the English in the Sandwich Islands than any other single event.” と評価している(92)。

²⁷ バンクーバーの人生については、Vancouver, vol.1, 2-3, Andrew C.F. David, “Vancouver, George,” Oxford Dictionary of National Biography online, Bown, 9-11 を参考にした。

²⁸ バンクーバーは父の関係筋からこのポストに入ったと考えられている。詳細は Vancouver, vol.1, 2-4 を参照のこと。少年見習いといった立場であるが、Andrew C. F. David は “Although rated as an able seaman Vancouver was in fact a young gentleman of the quarterdeck.” と書いている。ここから考えると、少年見習いとはいえクックに直接指導を受けられる立場であった。David, “Vancouver, George” を参照。

²⁹ バンクーバーはカナダ北西湾岸にあるポートランド湾 (Portland inlet) の入口を、この数学者の名を取ってウェールズ・ポイントと名付けた。“The west point of Observatory inlet I distinguished by calling it POINT WALES, after my much-esteemed friend, Mr. Wales, of Christ’s Hospital; to whose kind instruction, in the early part of my life, I am indebted for that information which has enabled me to traverse and delineate these lonely regions.” (Vancouver, vol.3, 1030)

³⁰ *Naval Chronicle*, 125 参照。

³¹ クックの第3回航海に同行した Thomas Edgar (Master) の記録を参照。Godwin, *Vancouver A Life*, 289-296. この記録はクックの死に遭遇した船員の一人が書いたものであり、バンクーバーが現地人に襲われた他の隊員を助けた話が出てくる。現在まで活字化されているのは、著者の知る限りこの書籍に紹介されているもののみである。

³² バンクーバーはこの調査探検の間、多くの訪問地に名前を付けており、ほとんど現在でもつかわれている地名である。ポート・コンクルージョンもその一つである。

³³ Vancouver, vol.1, 106-110 参照。

³⁴ Anderson はバンクーバーの外交術を次のように高く評している。“[R]ecalling the sharp official differences that developed between Vancouver and Quadra—that the desires of each were checked by the attitude and position of the other—and that during those tense negotiations a warm personal friendship and mutual regard grew between the two men, both must be termed skilled and expert diplomats” (109).

<参考文献>

- Alexander, William DeWitt. *A Brief History of the Hawaiian People*. New York, 1891.
- Anderson, Bern. *The Life and Voyages of Captain George Vancouver: Surveyor of the Sea*. Seattle: University of Washington Press, 1960.
- Bancroft, Hubert Howe. *The Works of Hubert Howe Bancroft Vol. 27. History of the Northwest Coast. Vol.1 1543-1800*. San Francisco, 1884.
- Bown, Stephen R. *Madness, Betrayal, and the Lash: The Epic Voyage of Captain George Vancouver*. Vancouver: Douglas & McIntyre, 2008.
- British Newspaper Archive. <https://www.britishnewspaperarchive.co.uk> 20210107
- Fisher, Robin and Hugh Johnston. *From Maps to Metaphors: The Pacific World of George Vancouver*. Vancouver: UBC Press, 1993.
- Fulford, Tim, et.al. *Literature, Science and Exploration in the Romantic Era*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Gordon, George. *Vancouver: A Life, 1757-1798*. London: Philip Allan, 1930.
- Jackson, C. Ian. "Three Puzzles from Early Nineteenth Century Arctic Exploration." *The Northern Mariner*, 17 (2007): 1-17.
- Jarves, James Jackson. *History of the Hawaiian or Sandwich Islands*. Boston, 1843.
- Kuykendall, Ralph S. *The Hawaiian Kingdom: 1778-1854 Foundation and Transformation*. 1938; Honolulu: University of Hawaii Press, 1965.
- Maly, Kepa and Bruce A. Wilcox. "A Short History of Cattle and Range Management in Hawai'i." *Rangelands*. Society for Range Management, University of Arizona. 2000, October, 21-23.
- Naval Chronicle. From January to June*. London, 1799.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Online edition. <https://www.oxforddnb.com/> 20200113
- Royal Naval Museum, Portsmouth's Historic Dockyard. <https://www.royalnavalmuseum.org> 20210109
- Tolstoy, Nikolai. *The Half-Mad Lord*. London: Jonathan Cape, 1978.
- Vancouver, George. *The Voyage of George Vancouver 1791-1795*. Ed. W. Kaye Lamb. 4vols. London: Hakluyt Society, 1984.

石倉和佳 「記述することの空白:『ブリタニカ百科事典』の描くハワイ」 『カルチュラル・グリーン』 1 (2020):25-46

石倉和佳 「日本人ハワイ移民の移民会社:愛国同盟の人々を中心に」 『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 21 (2019):29-40

奥村多喜衛 『太平洋の楽園』 東京 1917年